

言語資料としての国会会議録の特徴(1)

— 本会議と委員会等との比較 —

服 部 匡

0 はじめに

国会会議録検索システム (<http://kokkai.ndl.go.jp>) で公開されている国会会議録は、1947年以降の国会の諸会議（本会議・委員会等）の議事内容を文字化した資料で、会議録情報（日付・出席者一覧等）も含めて、2006年までで約35億字にのぼる膨大なデータである。その概要や言語研究への利用の上での問題点については松田編（2008、特に第1・2章）が非常に参考になる。

上記システムからダウンロードした国会会議録のデータを利用して現代日本語の通時変化や共時的な言語現象を研究する上で参照が必要となる、データの基本的な諸特徴について、順次調査し報告したいと思う。

今回は、国会を構成する諸会議のうち、本会議とその他の会議（委員会・委員会の分科会や公聴会・連合審査会・調査会、その他）の特徴の相違を取り上げる。以下では本会議以外の会議を総称して「委員会等」とする。

対象とする会議は、参議院に限定する。その理由は、参議院の会議録では（若干の例外はあるが）原則として個々の発言の頭に発言者名がフルネームで記載されていて技術的に処理しやすいからである。また、参議院委員以外の者（閣僚・参考人・証人・政府委員・衆議院議員等）の発言は原則として扱わない¹⁾。

各議員の生年・参議院議員在職期間は、参議院のウェブページ・『議会制度百年史』・『歴代国会議員名鑑』・『参議院要覧』・各種ウェブサイトによって調査した。年齢の計算は当人の出生年と発言のあった日の属する年との差によるため、発話時の実際の年齢より1歳大きい値になっている場合がある。

以下で用いるのは、1947年（第1回）から2006年（第165回）までの会議録

のデータである (データ処理の詳細については服部 (2011) を見られたい)。

1 発言者 (参議院議員) の年齢の分布

最初に、会議での発言者の年齢層別の発言回数を、本会議と委員会等に分けて示すと表1・表2のようになる。発言回数とは、会議録に一発言として記録されているものの数である。

表1 本会議での発言回数

横軸：話者の年齢 縦軸：会議の時期

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
1940年代	187	685	1,364	1,826	3,904	4
1950年代	193	2,195	3,595	6,770	11,870	12
1960年代	60	591	1,834	3,944	7,092	16
1970年代	53	468	1,195	3,097	5,080	21
1980年代	2	161	701	4,840	2,161	10
1990年代	26	211	4,566	2,143	1,584	1,724
2000年代	76	256	635	4,223	4,197	2

表2 委員会等での発言回数

横軸：話者の年齢 縦軸：会議の時期

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
1940年代	7,881	23,039	45,876	20,319	5,708	7,881
1950年代	17,072	164,476	213,128	98,979	22,267	17,072
1960年代	11,159	80,892	147,319	102,216	19,066	11,159
1970年代	12,189	96,429	141,929	95,281	25,728	12,189
1980年代	1,596	28,950	139,905	102,488	27,149	1,596
1990年代	7,285	32,666	82,233	99,335	32,100	7,285
2000年代	15,075	46,157	79,771	76,494	21,022	15,075

表1・表2から発話における発話者の年齢の平均と分散を求めると表3・表4のようになる。それらを見ると、本会議と委員会等では発話者の平均年齢に差があり、前者の方がずっと高いことが分かる。

表3 本会議での発言者の年齢の平均と分散

	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
平均	63.53	66.60	68.06	67.42	66.00	65.02	66.69
分散	90.42	104.56	77.64	70.87	33.43	96.36	53.09

表4 委員会等での発言者の年齢の平均と分散

	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
平均	53.24	53.46	55.52	55.45	58.72	59.16	53.24
分散	80.83	75.32	77.94	86.3	57.87	87.69	80.83

次に、表1・表2から議長等の発言を除いた数値を示すと以下のようになる。
「議長等」とは、議長・副議長・会長・委員長等とその代理を指す²⁾。

表5 本会議での発言回数

横軸：話者の年齢 縦軸：会議の時期（議長等の発言を除く）

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
1940年代	187	685	754	402	137	4
1950年代	193	2,195	2,566	1,271	413	12
1960年代	60	591	1,314	1,028	244	16
1970年代	53	468	877	806	314	21
1980年代	2	161	701	856	298	10
1990年代	26	211	744	1,121	395	33
2000年代	76	256	635	782	214	2

表 6 委員会等での発言回数

横軸：話者の年齢 縦軸：会議の時期（委員長等の発言を除く）

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
1940年代	6,505	20,810	20,975	10,862	1,956	17
1950年代	15,303	135,404	158,543	60,413	9,774	830
1960年代	10,972	77,353	124,760	74,139	10,250	513
1970年代	12,155	91,587	128,122	72,136	17,271	1,139
1980年代	1,596	27,090	128,606	82,657	18,726	504
1990年代	7,235	30,924	74,953	79,497	19,493	788
2000年代	14,161	42,894	66,810	57,075	13,615	971

議長等の発言を除いた場合の発言者の年齢の平均と分散を表5・表6から求めると、それぞれ表7・表8のようになる。

表 7 本会議での発言者の年齢の平均と分散

（議長等の発言を除く）

	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
平均	52.69	53.88	57.06	58.08	60.81	61.3	58.72
分散	96.64	83.22	76.33	94.26	62.35	75.36	85.49

表 8 委員会等での発言者の年齢の平均と分散

（委員長等の発言を除く）

	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
平均	51.18	52.34	54.37	54.43	58.09	57.97	55.59
分散	80.46	69.77	72.47	81.19	55.52	83.77	104.54

表7・表8では、本会議と委員会等での平均年齢の差は小さい。してみると、表3・表4に見られた平均年齢の大きな差は、「議長等の発言比率（and/or）年齢」が本会議と委員会等で異なることによると推定できる。

以上のことに関わらず議長等の発言には議事進行上の定型的発言が多いため他の議員の発言と区別して扱うのが望ましいが、特に、本会議と委員会等との言語

特徴を全体として比較する場合には、議長等の発言を除くことが適切と思われる。

2 コピュラ形式の選択

コピュラ形式「だ・である・であります・でございます」のうちどれがよく用いられるかを問題とする。終止形で文末（句点の前）に現れるものに限りに、また、漢字に後続するものに限って調査した。コピュラの前要素が名詞であるか（学校文法でいう）形容動詞語幹であるかは問わない。この調査では、前節の結果に基づき、議長等の発言は除外している。

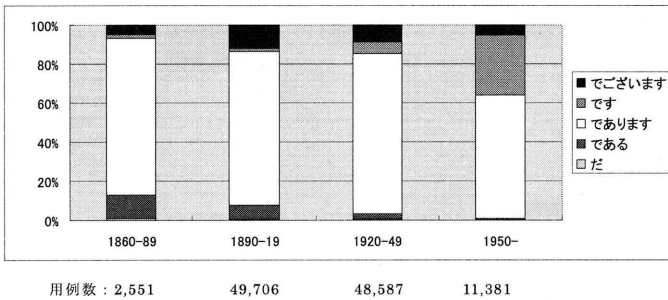


図1 文末でのコピュラ形式の使用回数（本会議）

話者の出生年代による

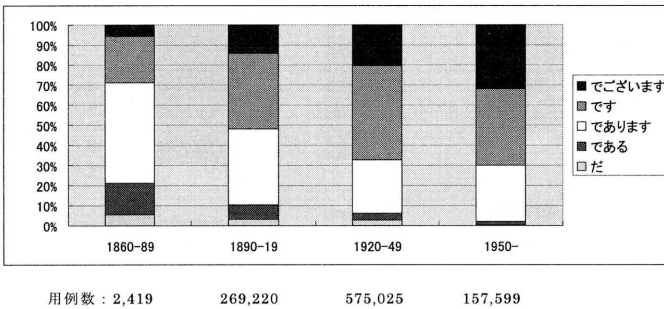


図2 文末でのコピュラ形式の使用回数（委員会等）

話者の出生年代による

言語資料としての国会会議録の特徴 (1)

まず、発言者の出生年代により区分して、それぞれのコンピュータ形式の使用回数を示したのが、図1(本会議)と図2(委員会等)である。

両者の間に顕著な相違があることが分かる。本会議では、(出生年代の若い話者で「です」の使用が増加しているものの)、一貫して「であります」の使用比率が高い。一方、委員会等では、「でございます」「です」を合わせた使用比率が話者の出生年代と共に増加し、他の形の使用が減少する傾向が明らかである。

次に、それぞれの形の出現回数を発話の時期により区分して示したのが図3(本会議)と図4(委員会等)である。ここでもよく似た傾向が観察される。

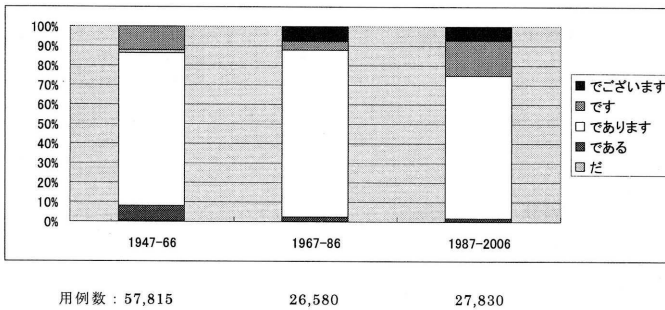


図3 文末でのコンピュータ形式の使用回数(本会議)

会議の時期による

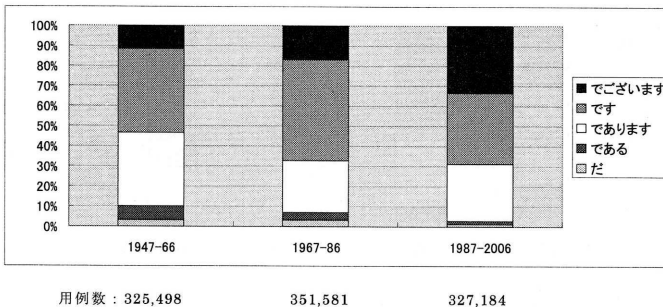


図4 文末でのコンピュータ形式の使用回数(委員会等)

会議の時期による

(容易に予想しうることもかもしれないが) コピュラ選択に関しては、本会議に比べて委員会等での発話では、より通常の談話に近い特徴が現れるようである。

3 コピュラに後続する終助詞

次に、コピュラに後続する終助詞の種類・出現回数を問題とする。前項と同様、議長等の発言は対象から除いている。

まず、文末での「です」が主要な終助詞(複数連続するものも含む)を伴うものと伴わないものの数を会議の時期ごとに示すと次のようになる。

表9 文末の「です」(本会議)

会議年代	終助詞なし	終助詞つき
1947-66	1,025	163
1967-86	1,246	434
1987-2006	5,061	538

表10 文末の「です」(委員会等)

会議年代	終助詞なし	終助詞つき
1947-66	136,601	102,573
1967-86	177,640	189,162
1987-2006	116,255	91,733

「終助詞なし」と「終助詞つき」の数の比を比較すれば、本会議では両者の開きが大きく委員会等では小さい。したがって、委員会等の方が「です」の後で終助詞が用いられやすいと言える。この点でも、委員会等の方が、通常の談話(特に対話的な談話)に近い特徴を示しているようである。

なお、表9・表10の終助詞の内訳を示すとそれぞれ次のようになる³⁾。

言語資料としての国会会議録の特徴 (1)

表 11 文末の「です」に後続する終助詞 (本会議)

会議年代	か	かね	ね	よ
1947-66	88	1	36	38
1967-86	414	0	9	11
1987-2006	467	0	36	35

表 12 文末の「です」に後続する終助詞 (委員会等)

年代	か	かな	かね	ぞ	な	なあ	ね	よ	わ	わな	わね
47-66	42,666	50	332	10	771	5	43,509	14,930	87	16	197
67-86	55,453	113	411	7	1,186	4	98,728	31,517	672	202	869
87-06	24,556	25	248	3	261	0	48,918	17,371	120	80	151

委員会等の方が多様な終助詞が出現することがわかる。

次に、「であります」に関して同様な数値をあげておく。

表 13 文末の「であります」(本会議)

会議年代	終助詞なし	終助詞つき
1947-66	45,285	177
1967-86	22,681	108
1987-2006	20,357	43

表 14 文末の「であります」(委員会等)

会議年代	終助詞なし	終助詞つき
1947-66	117,974	3,406
1967-86	90,478	2,096
1987-2006	92,758	791

表 15 文末の「であります」に後続する終助詞 (本会議)

会議年代	か	ぞ	ね	よ
1947-66	170	2	1	4
1967-86	107	0	0	1
1987-2006	43	0	0	0

表 16 文末の「であります」に後続する終助詞 (委員会等)

年代	か	かな	かね	ぞ	な	ね	よ	わな	わね
47-66	2,921	0	1	1	20	428	35	0	0
67-86	949	0	1	2	6	1,055	80	1	2
87-06	300	1	1	0	1	466	22	0	0

最後に「でございます」に関して同様な数値をあげておく。

表 17 文末の「でございます」(本会議)

会議年代	終助詞なし	終助詞つき
1947-66	6,860	68
1967-86	1,974	69
1987-2006	1,985	24

表 18 文末の「でございます」(委員会等)

会議年代	終助詞なし	終助詞つき
1947-66	37,934	7,510
1967-86	59,532	8,822
1987-2006	109,410	4,969

表 19 文末の「でございます」に後続する終助詞 (本会議)

会議年代	か	ね	よ
1947-66	66	1	1
1967-86	69	0	0
1987-2006	23	1	0

表 20 文末の「でございます」に後続する終助詞 (委員会等)

年代	か	かな	かね	ぞ	な	ね	よ	わね
47-66	5,923	2	14	1	29	1,491	49	1
67-86	5,617	2	11	0	23	3,084	74	11
87-06	3,226	0	3	0	12	1,669	57	2

4 おわりに

国会会議録に記載された参議院議員の発言に関して、発言者の年齢分布という言語外的事実とともに、文末でのコピュラ形式の選択、および、コピュラの後の終助詞の有無・種類という面から、本会議と委員会等での特徴の相違を分析した。他にも着目すべき点は多いが、今後の課題とする。

注

- 1) ただし、2007年以前で、ある人物が最初に参議院議員になってから最後に参議院議員でなくなるまでの間の発言であれば、議員以外の身分（大臣等）での発言であっても当人の発言に含める（このことが調査結果に与える影響は小さいと思われる）。また、上の期間中の人物と同姓同名の者を誤って本人と認定した可能性がわずかにある（期間が重なる議員同士の同姓同名はない）。参議院議員の、衆議院や両院合同の会議での発言は扱わない。
- 2) 右に合致するものを委員長等の発言と判定した。データから発言者の肩書き部分を切り出し、/長（代理）?\$/ という正規表現にマッチした発言。
- 3) これら以外の終助詞もごくわずかな数の出現が見られる。

参考文献

- 服部匡（2011）話者の出生年代と発話時期に基づく言語変化の研究——国会会議録を利用して——『計量国語学』掲載予定
- 松田謙次郎（編）（2008）『国会会議録を使った言語研究』ひつじ書房

付記

本研究は、本稿は平成18～22年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」の計画研究の1つである「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」（研究課題番号18061004、通称「日本語学班」）による研究成果の一部である。内容の一部は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会（2010年8月29日）で発表した。